

一切は不思議なり。生きる力を賜りて

何度か師から聞きました法話のなかで、忘れられないお話があります。

昔、唐の時代、中国杭州に道林禪師という僧侶がいらっしゃいました。禪師はいつも樹の上に住み、そこで坐禅をしておられました。丁度そのころ、あの名高い詩人、白樂天がその地方で政治を司っておったのですが、一日禪師を訪ねられました。はるか樹の上の禪師に対して白樂天曰く、「禪師、そんなところに住んでおられたら危ないですよ。」禪師応えて曰く、「あなたこそ、最も危ないですな。」白樂天曰く、「いや、私はちゃんと地位を得て生活しておりますのでなんの危険もありません。」禪師応えて曰く、「火のように燃え盛っているあなたの煩惱は止まることを知りません。それは危なくはありませんか。」・・・

白樂天曰く、「それでは仏法の大意はなんですか。」禪師応えて曰く、「もろもろの悪を為すことなかれ。もろもろの善を行え。自らその心を浄くする。これが仏の教えであります。」白樂天曰く、「そのようなことは3歳の子どもでも知っています。」禪師応えて曰く、「3歳の子どもでも知っているかもしれませんが、80の老人でもこれを行い尽くすことはできません。」白樂天は、「それはそうであります。」と言って頭を下げて退去したといひます。

ここで白樂天は、我々凡人の代表であります。つまり煩惱を欠け目無く備えて、自らの幸せのために、名利（名誉と金）を追い求め、健康を追い求め、地位の向上と安泰を追い求め、家族の安寧を追い求め、そのために煩惱をフルに発揮している私どもの姿ですね。煩惱を捨てることなど決してできない私ども人間といたしましては、煩惱を盛んに働かせて生きていかざるをえんのですけれども、その方向のみが必ず幸せに導くという考えだけで進んでいくと、きわめて危ないよと、禪師は注意されているのだと思います。それは、なぜかといひますと、そういうものは諸行無常で、究極的にはほんまに当てにはできないからであります。それは、今回の東北大地震で、まざまざとこの世の実相というものを見せつけられましたので、否が応でもうなずくしかありませんね。

それに対して、道林禪師はどうかと申しますと、禪師も私どもと同じ、煩惱を欠け目無く備えている同じ人間です。それでは、禪師と私どもとどう違うかと申しますと、どうやら禪師はいつも樹の上で坐禅せられて、一見危ないように見えますが、実は反対で、自分がいつ落ちるかも知れんということに心の眼が開いておられてますので、かえって油断が無く、「落ちるときは落ちるのだ」というお任せした心境に住しておられたのではないかと思います。それは、外的な諸行無常だけではなく、己の内側の煩惱の恐ろしさをじつとにらんでおら

れたのでありましょう。こういうお方は、柳に雪折れなしといった風情で、生きれるときは生きてゆける、病気になるときは病気になっていける、失業するときは失業していける、失恋するときは失恋していける、財産を失うときは財産を失っていける、事故にあうときは事故にあっていける、災難に逢うときは災難に逢っていける、落ちるときは落ちていける、そして死ぬときは死んでいけるという、執着心が無い、自力心の頑張りがない悠々たる自由自在の心境を手に入れて、お念仏しつつ、日日暮らしている方でありましょう。

それに対して我々は、何か今ある地位に、財産に、健康に、家族に執着しつつ、これを失っては大変としがみつつ暮らしており、そこに不安と不自由さを心の底に秘めつつ生きておりますね。実際問題としてそうしていくより他はないのでありますが、それだけでは何かやはり空しいし、精神的な深い満足感、喜びを得られず、またどん底の心の苦しみをなめねばならないかもしれませぬ。

だからこそ、われわれ普通の凡人の生きる道として、どうか仏心を得てくれよと願われているのであります。それが、先ほどの道林禅師の言われたお言葉の中の、「自らその心を浄くする」ということでありまして、それは煩惱を無くして心を清浄にせよという意味ではなくして、煩惱を無くすことは決してできないのでありますから、それはそのままとして、心も言葉も絶え果てた何ともかとも言いようが無い不可思議な仏様の深い深い願いに出会うといいましようか、触れるといいましようか、うなずくといいましようか。こうして、世界が存在し、私が存在しているそのものの不思議さと申しましようか、何ともかとも言い表しようが無いのですが、ひとこと、「不思議だなー」という思いが湧いてきます。自分の手をじっと見ている、そういう心境になるときがあります。また一輪の小さな花を見て、ふとその不思議さに感動し、「一切は不思議なり」、という何とも言えない喜びが出てきます。「ああ、私という一つの生命体がここにおる。何という不思議。存在、あること不思議・・・」

『正覚大音 響流十方（しょうがくだいおん こうるじっぼう）』というお経（嘆仏偈）の文言があります。それはどういうことかといいますと、我々人間一人ひとりに、どうか気づいてくれー、目覚めてくれーと四六時中休むことなく、はたらいているお慈悲の力、願いが、そこらじゅうを響き渡っております。それが、なかなか我々には聞こえず分からないのでありますが、何かの機縁でふとわが心に届き、不思議な感動、喜びがおのずから湧きあがり、この不安だらけの世界を生き切り、そして死んでいける身にならしてもらうのです。それが、この世に生まれた無上の喜びであり、生きていける力になると思います。それにはやはり、普段の生活の中で、煩惱だらけの自分の身に引き当てて仏法を聞いていくという誰にでも開かれている道を歩んでいくしかないと存じます。（ご質問、ご感想をどうぞ下さいませ。 mikinakura@nifty.com まで。）合掌